

〔論 文〕

『説得』における孤立感

Isolation in Jane Austen's *Persuasion*

入 野 賀和子

Kawako Irino

「私達女性は、確かにあなた方男性のようにすぐにあなた方のことを忘れることはありませんわ。私達の美点というより多分、私達の定めなのですわ。どうしようもないのです。私達は、家の中で静かに閉じこもって暮らしていますから、感情に捕えられ蝕まれてしまうのです。あなた方男性は活動を強いられますもの。すぐに世間に連れ戻してくれるような職業や仕事や何かしらの用事がいつもおありですわ。常に仕事や変化に囲まれていれば、印象もすぐに薄れてしまいますわ。」⁽¹⁾『説得』(*Persuasion*, 1817)の女主人公アン・エリオットは、女性が変わらぬ愛情を抱き続ける理由を笑みを浮かべながら静かに弁護する。アンの弁明はあくまでも慎ましく穏やかなものであるが、同時にその奥底には、意義ある活動の場も与えられることもなく、「感情に蝕まれながら家の中で静かに閉じこもって暮らしている」女性達の鬱屈した思いや哀しみが潜んでいる。アンという女主人公を通して描き出される思い遣りや優しさ、アンを取り巻く現状に対する逼塞感、この二つの要素が渾然一体となって展開されていくのが『説得』という作品であると言える。アンの意識の中に入り込んで共感を込めた丁寧な描写がなされているかと思えば、父親のサー・ウォルターの描写に代表されるような突然突き放したような、素っ気無い描写へと転換してしまう。『説得』がジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775-1817)の作品の中でも「最も暖かくまた最も冷たくもある」⁽²⁾ 作品と言われる所以である。オースティンのそれまでの作品と同じような調子を期待して読み始める読者にとっては、『説得』の出だしはいささか当惑を覚えさせるものがある。冒頭から事態はすでに行き止まりの感がある。従って読者は、ジュリア・プリウイト・ブラウンも言っているように、これ以上のさらなる悪化はあり得ないのだから事態は下降ではなく上昇に転じるものと当然のことながら予測する。⁽³⁾ ところが事態は好転の兆しを見せるどころか、物語の展開はさらに息苦しくなっていく、重苦しいような圧迫感が作品全体に浸透していく。

ジェイン・オースティンが『説得』の執筆に取りかかったのは1815年の夏頃、彼女が四十歳近くになった時である。その四か月前には、若さと自信に満ち溢れた二十一歳のエマ・ウッドハウスを主人公にした作品を完成させたばかりであった。『説得』では、それまでの二十歳前後の結婚適齢期の女性を主人公にした作品から大きく転換して、婚期を逸しかけている二十七歳の女性を主人公に据えている。しかも八年前に母親代わりの女性に説得されて婚約を破棄し、それ以来後悔の念に付きまといわれている女性という設定である。オースティンのそれまでの作品では、女主人公が到達する幸せな結婚が即ち、社会の中に自らの居場所を確立することにつながっていた。つまり、結婚が安定した人生の到達点になり得ていたのである。ところが『説得』に登場する人物達の多くは、夫や妻や婚約者と死別しており、物語の出だしではアンも事実上は婚約者を失ったも同然の身の上である。彼等の

立場は流動的で、結婚という形態によって自らの居場所を確立することができなかった孤立感に覆われている。主人公を婚期を逸しかけている二十七歳の女性に設定することで、女性の置かれた不安定な立場がより一層鮮明になり、その孤立感を際立たせることになるのである。本論ではアンの孤立感に焦点をあてながら、女性にとって自己存在の確立とは何か、という問題を追ってみたい。

1

由緒ある家柄を誇る準男爵家に生まれながら、アンは自らが置かれた境遇を享受することができないばかりでなく、家族の中でも疎外された存在である。家柄と外見の美しさのみが人間の価値を決定すると考える父親のサー・ウォルターの関心は全て長女のエリザベスに向けられ、母親似の華奢で繊細なアンの存在はほとんど無視されている。「本物の理解力の備わった人々ならば高く評価したであろう心の優雅さや優しい性格を持っている」(11-12)とされるアンは、エリオット家の中では「取るに足りない存在」、「ただのアン」(12)としか見られない。ある意味では、『説得』は前作の『エマ』とは対照的な作品であると言える。エマが父親の愛情と信頼を一身に集め、これ以上望むべき物は何もないほど恵まれ甘やかされた女主人公であるならば、アンは父親からの愛情も信頼も無縁で、常に孤立した存在である。

オースティンの作品においては、父親の場合であれ、母親の場合であれ、女主人公達は親子関係において何らかの問題を抱えており、それが彼女達の結婚観に大きな影響を及ぼしている。言わばそのような親子関係から飛び出すためにも、彼女達は相応しい伴侶と巡り会い、新たな家庭を築くことを必要としていたのである。しかし彼女達が親子関係にささか問題を抱えていたとしても、親子の情愛が存在し、親達の欠点を許容するおおらかさが描き出されている。ところがエリオット家でのアンは、寄宿人同然のクレイ夫人以下の位置しか与えられていないのである。親子、姉妹関係のこれほどまでの断絶は、それまでのオースティンの作品には見られないものである。

アンの状況は、未婚女性の置かれた苦境を象徴している。アンの経験する閉塞感は、社会はもちろん家族の中にさえ自らの居場所を見出せない無力さからくるものである。アンより二歳年上の姉のエリザベスは、結婚市場からの退場を余儀無くさせられる「危険な年齢」に近付いていることに内心では不安を感じながらも、母親亡き後エリオット家の女主人としての役割を享受し、長女としての立場に自らの存在意義を見い出している。また妹のメアリは、十九歳で早々と近隣の地主の長男と結婚することにより、妻としての自分の居場所を手に入れる。サー・ウォルターの美男子ぶりと家柄に惹かれて結婚したアンの母親でさえも、その結婚生活は決して幸福とは言えないまでも、一家の女主人として、また母親としての役割に十分自らの存在意義を見い出していたのである。アンの立場が象徴しているように、女性にとって未婚であることは、いつまでも自らの役割と存在意義を見出せない不安定さを意味している。しかしアンの置かれている立場は、明らかにマスグローブ家のルイーザとヘンリエッタ姉妹の状況とは異なるものである。学校教育を終えたばかりの十九歳と二十歳の姉妹は、今まさに結婚市場に登場したばかりであり、未知の可能性に包まれ「世間一般の若い女性達同様、当世風に楽しく陽気に暮らす」(43)ことが彼女達に振り当てられた役割なのである。

さらにアンにとって厄介なことは、その知的優位性ゆえの孤立である。エマが知的に対等な友人関係を手に入れることができなかったために、自信過剰から自我が肥大してしまうのとは対照的に、アンは周りの人々から正当に評価されず、常に否定され譲歩することを求められる。家族の重大事に關しても相談されることさえなく、唯一アンの能力を高く評価しているレディ・ラッセルと共に作成し

た債務返済のための案も、体面や威厳を重んじるサー・ウォルターやエリザベスからは一顧だにされない。さらにはまた、エリザベスに取入るクレイ夫人の目的がサー・ウォルターとの再婚にあることをエリザベスに警告しようとしても、根拠のない疑いとばかりにかえって憤慨されるだけである。そのような時、アンにできることは、義務としてすべき忠告はしたという思いと共に沈黙の中に立ち返って行くだけである。

アンは優しく、思い遣り深い性格ではあるが、彼女の知性は決して妥協を許さない強靱さも持っている。十九歳でウェントワースとの婚約を破棄して以来、八年の歳月が経過しているが、彼女の暮らす狭い社会には彼を超えるような男性は現れず、またアンへの洞察力の鋭さは、相手の男性に対する好みの気難しさにも繋がり、便宜上の結婚という妥協を許さない。アンが経験する孤独は、鋭敏な感受性と知性を備えた女性が直面する、知的にも情緒的にもある種対等と言える伴侶に巡り会うことの困難さを表していると言える。一度はアンとの結婚を望みながら今はメアリの夫となったチャールズに対しても、「能力や話術や優雅さにおいては優れているとは言い難い」(45) 彼の实像をしっかりと見据えており、「狩猟以外に熱中するものはなく、本を読むといったような事から何かためになることを身につけるといってもなく、ただただ時間を浪費して暮らしている」(45) と、彼の性格の良さを認めつつもその呑気で無為な暮らしぶりを批判的に眺めている。

アンへの知的優位性は彼女を孤立させることになるが、その一方でアンにとってはそのような知的優位性こそが彼女自身の存在の核となっている。家族の中にも疎外感を味わっているアンは、家族の愛情に包まれ、眩しいほどの若さと幸せの真只中にいるマスグローブ家の娘達を羨ましいと思うことはあっても、彼女達のようになりたいと願っているわけではない。

私達はだれでも自分の慰めとなるような優越感を持っていて、できれば相手と立場を取替えられたらなどという願いを持たなくてすんでいるが、アンも彼女達二人（ヘンリエッタとルイーザ）の享受している楽しみと引換えに、彼女自身のはるかに上品で教養ある心を手放したいと思ったことはないであろう。(43)

アンはその知的優位性ゆえに孤独であるが、同時にそれは彼女自身を支える誇りでもある。さらにまた、アンは自ら孤独の中に安らぎを求めてもいる。何か動揺させられるような事態に直面する度に、アンはひとりきりになりたいと願う。ひとりになってその事態を反芻し消化し受け入れようとする。アンにとって孤独になることはまた、自分自身を取り戻し、自らを立て直すために必要な手段でもあるのだ。

2

自らの居場所を持たないアンは、父親と姉がバースに引っ越した後、レディ・ラッセルやマスグローブ家の人々といった様々なグループの間を渡り歩くことになる。自分の娘同様に愛してくれているレディ・ラッセルの屋敷での滞在は別として、他家に滞在することはアンに改めて自らの存在意味を問いかせさせることになる。

アンはわずか三マイルの距離であっても、一つの家族を離れ他の家族へと移っていくことは、しばしば話題も意見も考え方も全く違う状況に出会うことを意味するのだということを、アッパ

ークロスへのこの訪問で学ぶ必要はなかったのである。そのようなことはこれまでの滞在でいつも感じてきたことだし、ケリンチ邸ではあれほどまでに周知の事実で誰もの関心事として扱われている事柄が、ここでは全く知られていないか、関心も持たれていないということのエリオット家の他の人達にも知ってもらえたらいいのにと思っていた。しかしそのような経験にもかかわらず、人は自分の家族以外のところでは自分自身が無の存在 (“nothingness”) であることを学ぶことがなおも必要であることを彼女は今感じていた。(43-44)

アンに対して “nobody” “nothingness” という表現が多用されているように、アンはたえず己の存在の小ささや限界を実感させられている。エリザベス・ベネットやエマ・ウッドハウスが自らの能力への過信からの覚醒を余儀無くされる女主人公だとすると、アンは自らの無力さに絶えず向き合わされ、不当なまでに過小評価されている状況からその資質を周りから正当に評価されるようになる女主人公である。言い換えれば自己認識を迫られるのはアン自身ではなく、アンを取り巻く人々ということになる。

常に周りの人々の関心と愛情を要求する妹メアリが、話し相手としてアンを側に置きたいと思ったことから始まったマスグローブ家滞在中ではあったが、アンはたとえその招待がメアリの自己中心的な動機から出たものだとしても、自分が必要とされているというささやかな有用性に自らの存在意義を見い出そうとする。

不作法な言い方であれ、少なくとも何かの役に立つからと求められる方が、全く役に立たないと拒絶されるよりはましである。そしてアンは何かの役に立つと思われたことや、果たすべき務めとみなされるものを持つことが嬉しかった。(36)

マスグローブ家滞在中のエピソードは、アンが見失いかけていた存在意義を徐々に見い出していく過程を描き出していると言えるが、その過程でキーワードとなるのが、“useful” ということである。アンはメアリやマスグローブ家の人々の不平不満に耳を傾け、お互いへのとりなしをし、また幼い甥達には優しい叔母として、雑然としたメアリの家庭に少しずつ秩序をもたらしていく。

幼い甥のチャールズがひどい転びかたをして、脊椎損傷の可能性もあるほどの傷を負ったとき、アンは怪我人の世話をし、薬剤師を呼びにやり、メアリを落ち着かせ、召し使い達に指図したりと、すべてを一人で采配する。この時の的確な対応と看病で発揮した有用性は、後に起こるライムでのルーイーザの事故への対応を予想させるものであるが、マスグローブ家の人々の良き相談相手としての、些細だがアンが有用性を示すエピソードの積み重ねは、アンが周りの人々から必要とされることによって自らの存在意義を見い出していく過程と重なりあっているのである。

アンが無力感を感じたのは、ウェントワースとの婚約破棄以来、過去にばかり立ち返り未来を見つめ信じることができないところから来ている。そしてマスグローブ家滞在中のウェントワースとの再会を通して、アンは「個」としての存在の自信回復への道を辿り始めるのだが、オースティンのそれまでの作品と異なり、『説得』の主人公同士が直接語り合う場面はほとんど描かれない。ふたりが和解してお互いの気持ちを語り合う結末の場面を除き、ウェントワースの言葉は間接的に第三者を通してアンに伝えられるだけである。それほどまでにふたりの間の溝は深いものがある。再会して間もなくメアリを通して伝えられる「あの人がと分らないくらい変わってしまった」(61) というウェントワースの言葉を、アンは黙したまま深い屈辱感と共に甘受することになる。ウェントワースのよそよそしい礼儀正

しきやわざとらしい丁重さにアンは深く傷付きながらも、平静さを装おわざるを得ない。ルーザーやメアリ達と一緒に散歩に出た時、アンはルーザーとウェントワースの会話を偶然にも耳にしてしまう。

「…あまりにも言いなりで優柔不断な性格の最大の問題点は、どのような影響を受けてもそれが長続きしないことなのです。良い影響を受けたとしてもそれが持続する保証はないのです。誰の意見にも簡単に左右され言いなりになってしまうのです。幸福になりたいと思うなら、意志堅固でなくてはなりません…僕が興味を抱いている人々に対して何よりも望むことは、堅固であって欲しいということです。もしルーザー・マスグローブが人生の十一月にも美しく幸福でありたいと願うなら、今の心の強さを大事にしていくことです。」(86)

アンは間接的に、ウェントワースが彼女をどのように見ているかをはっきりと知らされる。ウェントワースは、彼への愛情よりもレディ・ラッセルの説得を受け入れたアンの行動を性格の弱さから出たものとし、許すことができないでいた。アンは釈明することもできず、ただ沈黙の中に逃げ込むだけである。

オースティンの『説得』以前の作品では、主人公同士の会話がお互いを理解し合うための重要な要素になっている。他の登場人物達もほとんどが大変饒舌である。言わば膨大な会話の積み重ねで作品が出来上がっているのだが、『説得』では逆に寡黙さが際立っている。アン以外の登場人物達はそれまでの作品同様に饒舌ではあるが、彼女の心の目を通して描き出されるために、彼等の饒舌ぶりは逆に作品の背後に退いてしまう。作品の主眼はあくまでもアンの内省を描き出すことにあり、アンにとっての「真実」は外側の世界ではなく彼女の内なる世界にある。そのような場合、目の前で繰り広げられる会話をそのまま写し取る手法ではもはや十分とは言えず、むしろそれらの会話が女主人公にどのように受け止められるかを描き出すことが重要になってくるのである。アンとハーヴィル大佐の会話を耳にしたウェントワースがアンの本心を知り、思わず手紙で彼女への想いを告白するに至る場面を、オースティン自身が納得いかず破棄してしまった章の中の場面と比べてみれば、その効果の程は歴然としている。書き直しをされる以前の章では、アンとエリオット氏との婚約の噂を聞いたクロフト提督がケリンチ邸を引き渡す必要があるのか知りたくて、ウェントワースを通して噂の信ぴょう性をアン本人に確かめさせようとする。マリリン・バトラーも言っているように、書き直される前のこの結末の付け方は従来の喜劇的プロットの域を出ていない。⁽⁴⁾そして二人の和解は外側からの描写を通してのみ描き出されている。「彼(ウェントワース)は椅子を少し彼女(アン)の方に近付け、心に深く染みいるような何か、もっと優しく柔和な何かを含んだ表情で見つめた。彼女の方にもそれを励ますような表情が浮かんでいた。言葉は交わさなくともとても雄弁な会話だった。彼が懇願し、彼女が承諾する。さらに近付き、彼女の手を取り握りしめた…ふたりは再び結び合わされたのだ。」(Appendix,242-43)このような描写からは、アンの揺れ動く心の動きは伝わってこない。そしてオースティンが考え付いたのが、ウェントワースからの手紙という展開である。直接ウェントワースの口から語られるのではなく、手紙を通して心情を吐露されることにより、それを読むアンの揺れ動く思いにのみ焦点を当てて描き出すことが可能になる。作者の意図はあくまでもアンの心の動きを丁寧に追うことにあるからである。

常に背後に退いたようなアンの立場が、言わば下降から上昇へと転じるきっかけとなるのがライムでの出来事である。その兆しは海岸ですれ違った見知らぬ紳士が、生き生きとしたアンの表情に思わず見とれたことで、それが引き金となってウェントワースがアンの中に一瞬「かつてのアン・エリオ

ットのような何か」(101)を見い出したことにもすでに表れている。ルイーザの事故は、アンの有用性を実証し、ウェントワースにアンの資質を再認識させるきっかけとなる。側にいたチャールズやウェントワースまでが気が動転し、冷静な判断を失いかけていた時に、アンは控えめであるが的確な判断と指示を与える。あれほどまでに彼女を避けるようにしていたウェントワースが、彼女に判断と指示を求めるのである。

「あなたはとどまってくれますよね、とどまって彼女(ルイーザ)の看病をしてくれますよね」とアンの方を向き、熱っぽく、しかし優しい口調で話しかけた。それは過去の思い出を蘇らせるような響きを持っていた。彼女は顔を赤らめ、彼は我にかえり側を離れた。(111)

アンはウェントワースの思いつめたような訴えかけを、ルイーザへの愛情から出たものと解釈する。しかし彼女に求められているのが看護婦としての有用性だけだとしても、アンは喜んで彼のために役立とうとする。結局メアリが看護のために残ることを主張して譲らず、アンはマスグローブ夫妻にルイーザの事故を知らせる役目を負ったウェントワースと共に家路につくことになるが、帰りの馬車の中でも彼はアンに助言を求める。このようなウェントワースの態度の中に、アンは彼女に対する友情の証し、彼女の判断力への尊重の証拠を見出し、大きな喜びを感じるのである。

ウェントワースが自らの誤りに気づき、アンの資質を再認識していく過程は、アンが自らの存在意義を再確認し、自信を取り戻していく過程でもある。周りの人々に必要とされているという喜びが彼女を生き返らせ、積極的に行動することを可能にするのである。ルイーザ達と散歩に出かけた時、楽しそうに語らうウェントワースとルイーザを眺めながら、秋の陰りを見せる美しい情景の中で甘美な詩的憂鬱の世界にひとり閉じこもろうとするアンの傍らで、農夫達が「再び春を取り戻そう」(83)と、畑を耕していたように、アンも自らの春を再び取り戻すために行動し始めるのである。

有用性への視点は、他の登場人物の描写にも窺うことができる。国民のために働く海軍軍人はその最たる者である。「私達のためにあれほどの働きをしてくださった海軍の方々は、少なくともどのような家であれ、その家のもたらす快適さや特典を受ける権利を他のどのような人達にも負けぬくらいお持ちですわ。安楽な生活を送るに足る働きを十分なさっている、ということは認めなければなりませんわ」(24)と言うアンの言葉に見られるように、この作品では海軍軍人が大変好意的に描かれている。ハーヴィル大佐の一家は、裕福とは言い難い暮らしでありながら大佐の創意工夫で快適な住まいを作り出し、あたかも平安と家庭の幸福の縮図のように描き出される。一方、「神によって与えられた地位を維持していただくだけの道義も分別も持ち合わせていない、愚かで浪費家の準男爵」(234)であるサー・ウォルターに対しては、容赦ない批判が浴びせられている。また、同じく海軍兵士でありながら、「陸でも愚鈍で手に負えなかったので、海軍に送られ…運良く二十歳になる前に亡くなった」(52)マスグローブ家のリチャードは、「頭の鈍い思い遣りの無い役立たず」(52)の人間として作者によって素っ気無く切り捨てられる。有用性ということは、言い換えれば社会の中で自らに割り当てられた役割を積極的に果たしていくということでもある。「素性の卑しい者を分不相応な高い地位にまで昇らせ、その人物の父親や祖父が夢想だにしなかった榮譽をもたらす」(24)職業として海軍軍人を軽蔑しているサー・ウォルター自身が、生まれによって自らに割り当てられた地主としての役割を全うすることができず、屋敷を出ざるを得なくなるという現実が存在する。海軍軍人の台頭が象徴しているように、社会での役割が出自ではなく、能力によって決定されるような流動的社会では、それまでの土地経済を基盤にした伝統的社会では見られなかった「自己と社会における役割との乖離の危機」⁽⁵⁾

が起こりつつあることをオースティンは認識している。社会的役割が生まれた時から固定されているような社会状況が崩壊しつつあり、人々が自らの居場所、つまり自らの社会的役割を見い出していくことが要請される不安定要素を内包した時代の到来を作者自身感じ取っていたように思われる。アンは自らに割り当てられた役割を探し求め、自己実現を図ろうとする女主人公である。彼女は周りの人々に必要とされ、有用であることの中に、自らの存在意義を見い出そうとする。不安定要素を抱え込んだ流動的社会という新しい時代の到来の予感の中で自らの存在意義を模索する、言わば新しいタイプの女性をオースティンは描き出そうとしているが、アンが自らに見い出す役割はファニー・プライスが体現していた保守的な倫理観に基づく社会での役割の域を出ていないように思われる。「感受性溢れる豊かな内面生活と不毛な外の世界とを持つアンは、マギー・タリバーやドロシア・ブルックを予期させるものがあるが、不運なことに、彼女はまた、エリナ、もっと直接的にはファニーの方を振り返っている」⁶⁾と、この作品には新旧二つの技法が混ざりあっており、それがこの作品の弱点でもあるとバトラーは指摘している。言わば内面生活を描き出す十九世紀的小説と従来の価値観を含む十八世紀的小説が混在する形になっているのである。

アンを標榜する有用性とは、女性らしい献身的行為を意味しており、そのような行為がオースティンによってからかいの調子を込めて描かれることは決してない。「看病は男性の仕事ではないわ、男性の領分じゃないのよ。病気の子供はいつだって母親のものだわ、母親の気持ちがそうさせるものなのよ」(57)と、アンはこれこそが女性の有用性を発揮する領域であると主張する。あるいはまた、女性らしい献身的行為の典型的実践場所としての病室についての会話にもそれは窺うことができる。看護婦が病室で経験することに関して、友人のスミス夫人は「試練の時に人間性の偉大さが現れることもあるでしょうが、一般的には病室でお目にかかるのは長所ではなく弱点のほうじゃないかしら、寛大さや堅固な精神よりも利己心や短気が表に出てくるらしいですわ」(148)と、懐疑的な意見を口にする。それに対して、アンは「熱烈で無欲で私心のない愛情や勇氣、堅固な心、忍耐や忍従、私達の精神を高揚させるあらゆる葛藤や犠牲などの実例が目の前で展開されるに違いありませんわ。病室は何冊もの書物に匹敵するほどのものを与えてくれますわ」(147-48)と、病人への献身的行為と引換えにもたらされる喜びを語る。皮肉屋で世間知に富むスミス夫人の言動とは対照的に、いささか理想化の傾向があるように思われるアンという言葉に、オースティンのからかいの調子は込められていない。甥のチャールズの看病やルーイーザの事故に伴う確かな指示や判断の場面が、アン自身の自己存在の証明への過程となっているのは明らかである。アンが求めている自己実現は、あくまでも家庭的幸福の領域内で行われ得るものである。あまりに優しすぎるアンは、「ウェントワースの愛情に包まれてその優しさの真価が十二分に発揮される」(237)のであり、自分の家庭という強固な枠組みに支えられてこそ彼女の存在意義が見出せるのである。

3

アンはウェントワースとの結婚により、自らの居場所と役割を見い出す。しかし海軍軍人の妻となったアン立場には将来の戦争への不安が常につきまとい、『説得』以前の作品の結末がもたらしていたような安定感とははや見られない。そしてこの危うさこそがこの作品の基底に流れているものである。地主の妻となるエリザベス・ベネットやエマ・ウッドハウスは、確固としてすでに存在している土地に根をおろすことによって、その地域社会に参入していく。結婚が即、彼女達の安定した地

域社会への参入と結びつけて考えられるのは、土地という動かしがたい基盤が存在するからである。常に無い物ねだりのメアリが、アンの結婚を喜んで受け入れられるのは、彼女にはアンの持っていない土地という基盤があるからだ。「彼女(メアリ)には期待できる将来が、大きな慰めを与えてくれる未来があった。アンには将来所有すべきアッパークロス邸も地所も一族の長として振舞うような務めもなかった。だからウェントワース大佐が将来、準男爵にでもならない限りは、アンと立場を取替えたなどとは思わなかった」(235)とあるように、土地という背景を持たないアンとウェントワースの夫婦が、メアリにとって脅威となるのは戦功により爵位を授与されるような場合だけである。ここでも伝統的地主階級と海軍軍人によって象徴される新興勢力との対立の社会構図の一端が窺える。

古風な英国方式に若い世代の新しい方式を取り入れながら、時代と共に巧みに変容を遂げつつある地主階級のマスグローブ家は、一家の長を中心に大家族を構成している。そこでは夫婦単位よりはむしろ一家の長としての役割が強調されている。しかしクロフト提督夫妻に代表される海軍軍人のグループは、夫婦単位で行動し、彼等の結婚は「個」と「個」の結びつきの側面を持ち始めている。夫の任地にまで行動を共にするクロフト夫人の妻としての役割は、地主の妻としてのアンの母親やマスグローブ夫人の役割とは明らかに異なっている。「個」の結びつきとしての結婚は、家柄や財産といった条件以上にお互いの資質が問題とされるようになる。経済的裏付けがない故に無分別な結婚と言われ、婚約を破棄せざるを得なかったウェントワースとの過去に八年間も苦しんできたアンは、もし今同じような状況にある若い人から助言を求められたら、たとえ不確かでも将来の可能性に賭けることを勧めるだろうと述べている。十九歳と二十七歳ではアンの考え方に大きな変化が起こるのは当然であり、「彼女(アン)は若い頃に分別を持って振舞うように強いられ、年を取るにつれてロマンスを学んだ。不自然な始まりの自然な結末であった」(33)という一節は、アンの視座の変化に言及したものと解釈できる。しかし同時に、この変化は彼女のみならず社会に起こった変化でもあると言えないだろうか。結婚が「個」よりも「家」同士の結びつきと見なされる社会から、「個」のレベルの問題と捉えられる社会へと移行しつつあり、社会的にも倫理的にも「良き結婚」を標榜する社会から、結婚をあくまでも個人の問題とする社会状況が生まれつつあるのでないだろうか。

オースティンは作品の中で、「個」と「社会」との関係を追求めてきたが、『説得』ではその視点が「個」と「個」の関係に移ってきているように思われる。「個」を受け入れるべき社会が確固として存在するのではなく、社会自体が流動的になりつつある。「留まるに値しない者が去り、ケリンチ邸はその持ち主よりも立派な人々の手に渡った」(119)とされる当のクロフト提督夫妻も、やがてはケリンチ邸を去り別の場所に移り住むことであろう。サー・ウォルターやエリザベス、アンとウェントワース、ハーヴィル大佐夫妻といった人々もある場所からまた別の場所へと移動していくであろう。借地人や小作人や使用人も含めた雑然とした大家族を構成し、「個」が固定された社会の中に吸収されていくような時代から、「個人」対「個人」の関係に基盤を置く個人主義の時代へと移行しようとしていることをこの作品は予想しているように思われるのである。

注

- (1) Austen, Jane. *Persuasion*, Oxford University Press, 1980, p.219.本書からの引用は以後、本文中にページ数のみを記す。
- (2) Farrer, Reginald. "One of Fiction's Greatest Heroines" in *'Northanger Abbey' and 'Persuasion,'* Casebook Series, ed.

『説得』における孤立感

Southam, B.C., The Macmillan Press Ltd., 1976, p. 148

- (3) Brown, Julia Prewitt. *Jane Austen's Novels*, Harvard University Press, 1979, p.131
- (4) Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*, Oxford University Press, 1975, p.281
- (5) Brown, p.140
- (6) Butler, p.283